慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	表紙 ; Contents
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.16, (2011. 7)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000016--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2011 June No, 16

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

当事者と支援者の相互性
Helpers and Victims: A Mutual Relationship 1

平成 22 年度拠点全体シンポジウム
Future Trends in the Biology of Language 2

脳科学から宗教を解明する：その展望と批判的検討
Intersection of Brain and Religion Understanding Religiously Elevated Emotions via fMRI and General Theoretical Models of Mind and Emotions

西洋古典哲学シンポジウム
古代ギリシア・ローマの哲学とレトリック
Philosophy and Rhetoric in Ancient Greece and Rome 3

Richard Zach 教授講演会「イプシロン計算」
Lecture by Professor Richard Zach: "The Epsilon Calculus"

The Gachon NRI-Keio GCOE Joint-Symposium
ガチョン医科大学神経科学研究所・慶應義塾大学人文グローバル COE 共同シンポジウム 4

カントの超越論的観念論についての集中講義 III
Kant's Transcendental Idealism in Focus Part III 5

薬物摂取による快感は社会的要因にも依存する
Drug-induced Pleasure Depends on Social Factors

活動報告 6

印度における International Darwin Day へのビデオ参加
Video Participation to Darwin Day Symposium

Introspection in Humans, Animals, and Machines
ヒト、動物、機械における内省 7

事務局だより 8

当事者と支援者の相互性

Helpers and Victims: A Mutual Relationship

島薗　進
Susumu Shimazono

東京大学大学院人文社会系研究科・宗教学教授
Professor, University of Tokyo, Department of Religious Studies

東日本大震災からすでに数ヶ月を経て、「心のケア」が大きな課題であると認識されている。数多くの死者が出て死別の悲しみが深い上に、これまで暮らして来た土地での生活の再建が容易でない。地域社会そのものの再建に大きな時間がかかるし、仕事を変えたり、移住したり、身近な人々と別れて暮らしたりしなくてはならない人が少なからず出ることだろう。物的人的支援の動きもなかなか十分とは言えない中で、生活立て直しの困難な方々が多く、被災者の精神的な落ち込みが懸念される。

他方、新たな絆の生成もあり、小さな希望もそこかしこに生まれている。実際、困難を超えていこうとすれば、何らかの新たなつながりや絆を育てていくことが不可欠となろう。それは明るい知らせとなる。テレビのニュースを見ていると、何とか生活再建への手がかりを見出そうとしている方々の姿が映し出され、大いに元気づけられる。被災者が支援したいと思っている遠方のわれわれを元気づけてくれる場面に出会うことが少なくないのだ。

私は宗教界や宗教研究の知り合いの方々とともに、4月1日に宗教者災害支援連絡会という集いを立ち上げ、これまで数回にわたり情報交換会を行ってきた。支援にあたっている宗教者の方々から支援の経験について話をうかがい、おたがいに知恵を出し合い、より有効な支援をしていこうというものだ。

一つの悩みは宗教としての立場を強く打ち出すかどうかということだ。伝統宗教の威信を尊ぶ人たちや自らの精神性の価値を信じ布教の熱意に燃える人たちは、宗教の形を強く打ち出すことを主張する。しかし、それでは大多数の人からいやがられる。でも強い信仰をもつ人は、相手から退けられることこそ自らの信仰を深める試練であり、自らの正しさが示される時だとさえ考える。

これに対して、他者に寄り添うケアにこそ現代的な環境にふさわしい宗教性、精神性が宿ると考える人もいる。ケアするのだが受動性を尊ぶのだ。この場合、「心のケア」はケアする側とケアされる側の関係が一方的、固定的ではない。ケアする側も傷つき、自らの痛みをふり返りながら他者を理解し、癒されたり、学んだり、経験を積んで幅を広げたりする。相手の経験も自分の経験と似ているかもしれない。そのようにケアの経験は相互的なものなのではないだろうか。

もしそうだとすれば、それは「宗教」的なものが垂直的な権威関係よりも、水平的な相互的他者関係に力点を移してきたことと関わりがある。これは宗教や社会の心理学化と関わりがある。だが、それは人間の幅広い経験の領域が心理学の中に入り込むことでもあるだろう。ユング心理学やトランスパーソナル心理学のように心理学が「宗教」化するのも同時的だ。

宗教者災害支援連絡会には、宗教を掲げるわけではないが、自殺に関わることでスピリチュアルな次元に接した活動をしているライフリンクの方など、宗教集団の外部の方々もも参加して下さっている。日本の宗教と心理学がともに新たな次元を見出しつつあるのかもしれない。それが被災者を支援する力となるのかどうか。新しい動きの質が試されていると言えるだろう。

Mental health is arguably one of the major causes for concern in the aftermath of the 'Great East Japan Earthquake.' Survivors who have lost their families, jobs and hopes for recovery are particularly at risk of emotional breakdown. Their post-disaster lives are often entangled with religious activism and psychiatric therapies at the same time. While these two forms of aid may differ in their logics of action, they both speak to human experience in a broad sense. It is all the more pressing then to enhance their collaboration in ways that help people to cope with the trauma of the events.